

宮城県におけるホヤ養殖の復興状況

2013.1.4

農林中金総合研究所

専任研究員 出村雅晴

全国のホヤ生産地は北海道、青森県、岩手県、宮城県などであり、約1万トンの国内生産量がある。食用とされているのは主にマボヤとアカボヤであるが、北海道で主に生産されるアカボヤはほぼ全量が天然物という状況であり、養殖も含め生産量の多くはマボヤが占める。東北の珍味のひとつとされ、「海のパイナップル」とも呼ばれるホヤの主産地は岩手県宮古市付近から宮城県金華山に至る三陸沿岸であり、とくに宮城県が生産量の9割近くを占めていた(注1)が、この地域が壊滅的な震災被害を受けた。宮城県も、ホヤ養殖の中心であった牡鹿半島以北の鮫浦湾から気仙沼湾にかけての地域が被災し、石巻、気仙沼・南三陸地域の養殖ホヤは全滅した。

(注1)農林水産省『平成22年漁業・養殖業生産統計』による国内生産量は10,272トンであり、主要産地は宮城県8,663トン、岩手県1,093トン、青森県479トンなどとなっている。

1 ホヤ養殖の概要

ホヤの養殖工程は採苗と養成に大きく分けられる。採苗はこれまでは天然採苗であり、ロープにカキ殻を1連当たり70枚程度挟み込んだもの(「付着器」と呼ばれる)をはえ縄から垂下して行う。(注2) 時期的には、ホヤの産卵が始まる水温(10~11℃)に低下する11月下旬頃であるが、翌年の5~6月頃になればホヤとはっきり分かる状態にまで成長する。外洋性の漁場が適地とされ、鮫浦湾(石巻市)が宮城県を中心に県内外の産地へのホヤ種苗の供給基地の役割を担ってきた。

養成工程も採苗工程同様、はえ縄から垂下して行う。はえ縄の基本的な構造はカキやホタテなどと同じであるが、規模などについては100mダブル、100mシングル、あるいは浮き樽式、浮き玉式などさまざまである。ホヤの養殖施設は、カキなどに比べれば重さが軽いので、浮玉による浮力はカキ養殖よりも少なく済む。一方、外洋性の漁場が適地であることから、係留用の資材については十分な配慮が必要とされる。なお、成長による重量増加等を考慮して浮玉を追加する等の作業は、カキ養殖などと同じである。

種苗のほとんどは地先で採苗したもの、あるいは県内で採苗した購入種苗を使用し、出荷までの養成期間としては2~4年を要している。ホヤは、採苗してから2年目以降に急激に成長するという特徴があり、採苗を開始してから2年半を経過した3年目の5月頃から出荷が始まる。

養殖を行う海域の水深は一般的には6~9m程度だが、垂下する水深が浅いとムラサキイガイなどが付着するので、これらの発生時期には深めに垂下するなどの対応を行っている。

(注2)こうしておくとも海中に浮遊しているホヤの幼生が自然にカキ殻に固着する。

2 ホヤの生産と流通

東北の珍味として地元を中心に根強い人気のあるホヤであるが、生産量の概ね6割程度が輸出され、そのほとんどが韓国に仕向けられてきた(第1表)。韓国でも刺身用メニューとして人気のある商材だが、01~03年頃ホヤの殻が軟化・破裂する被囊(ひのう)軟化症(注3)がまん延した韓国のホヤ養殖生産量が激減し、現在も回復していないことがその背景にある。

第1表 養殖ホヤの生産量と輸出動向

(単位 トン、%)

	生産量A	輸出量B	国内消費量 (A-B)	輸出割合 (B/A)
2005年	8,624	2,812	5,812	33
2006	9,804	5,025	4,779	51
2007	10,169	6,707	3,462	66
2008	10,779	6,705	4,074	62
2009	10,937	7,318	3,619	67
2010	10,272	7,277	2,995	71
2011	693	990
2012	...	25

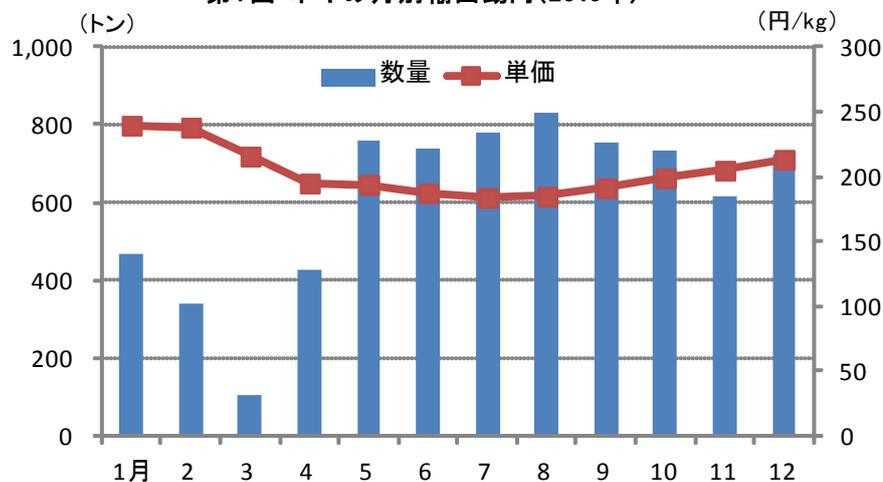
資料 農林水産省「漁業・養殖業生産統計」
財務省「貿易統計」(統計品目コード2011年まで030791200、
2012年以降030890110)

(注) 1 生産量は「ほや類」の養殖生産量。2011年は東日本大震災により消失したデータを含まない数値。
2 輸出先はほぼ全量が韓国(年によってアメリカ、香港、カナダ、シンガポール向けもあるが微々たる量)。

ちなみに、財務省の貿易統計上 05年に初めて品目コードが設定され、05年 2,812トン、06年 5,025 トンと輸出量が急増した。活魚輸送専用トラックで山口県下関市まで運ばれ、下関から釜関フェリーで釜山というルートが主な輸出経路である(注4)。

わが国の養殖生産量はこうした韓国への好調な輸出に支えられて拡大し、04年には15,093トンとピークに達した。この頃は生産量の7割が輸出に回ったとされているが、生育中の比較的若いホヤも収穫したことから種ホヤの成長が追いつかず、05年の生産量は急減した。このため韓国産種苗の導入も行われ、07年にはこれに起因するとみられる被囊軟化症の発生がみられ、農林水産省や県が病気の拡大防止に向けて調査や対策(注5)を行った。10年には石巻湾と気仙沼沖を除く県内の漁場にまん延していることが確認されたとの報道(注6)もあるが、今回の震災によって被害を受けたため、その後の生産状況は把握できない。

第1図 ホヤの月別輸出動向(2010年)



資料 財務省貿易統計

ホヤの旬は夏であり、出荷の最盛期は6～8月となるが、近年では晩秋の11月頃から翌春にかけての産卵期を除き、ほぼ周年出荷されている。月別の生産状況を反映する月別の輸出動向(第1図)からそうした状況が確認できる。なお、国内での消費形態は生のまま刺身、酢の物などにして食べる生食が一般的であるが、干物、塩辛、燻製、ゆでホヤなどの加工品もある。

(注3) 07年の宮城県での発症を受けて農林水産省や県が設置した「ホヤの新疾病に関する防疫会議」で「皮囊(ひのう)軟化症」と名付けられた。通称「フニャフニャ病」とも呼ばれる。

(注4) 10年を例にとれば、輸出量のほぼ全量が韓国に輸出され、その87%が下関経由となっている(博多経由10%、門司経由3%)。

(注5) 07.3.28付河北新報「感染症? ホヤ殻破裂 宮城県確認 漁場の養殖休止へ」当該漁場のホヤは全量撤去し、08年9月の漁業権切り替え時からホヤの養殖を5年間休止するという内容。

(注6) 10.12.4付河北新報「韓国で猛威のホヤ被囊軟化症 宮城でも感染拡大 生産量激減も」

3 復興に向けた動き

県内外の産地にホヤの種苗を供給してきた鮫浦湾(石巻市)も被害を受けたことから、ホヤ養殖の復興に向けた活動は種苗の確保から始まった。鮫浦湾の前網浜では、震災後の浜のがれき処理作業で採苗用のカキ殻が一定量発見され、11年11月に12人の漁業者がホヤ養殖の復興を目指して共同作業による天然採苗のための殻通し作業を行った(注7)。しかし養殖施設とともに親となるべきホヤの多くが流失しており、天然採苗だけでは十分な種苗の確保は期待できない状況にあり、宮城県水産技術総合センターの技術指導を受けて人工採苗(注8)に取り組む動きが広がっている。

養殖施設は「がんばる養殖復興支援事業」を利用した事例(1件)では、作業船については「共同利用漁船等復旧支援対策事業」を利用して復旧するが、養殖施設に関しては「養殖施設災害復旧事業」の利用は12年度復旧分だけで、次年度以降は自己復旧するとしている。また、石巻市寄磯地区などでは各種の支援金やアンカーとなる土嚢づくりではボランティアによる労力提供も受けながら復旧を進めているようである。カキやホタテなどとは違い大きな漁船も不要であり、設備投資もそう大きくない。収穫までには3、4年の期間が必要とされるホヤであるが、こうした利点に加えて養成にかかる手間が比較的少ない点などメリットも多く、ホヤ養殖の再開で復興を図る漁業者も多い。

しかし、宮城県漁協から提供を受けた資料によれば、12年9月末時点で事業を再開した経営体数は震災前の30%、設置された養殖施設数も14%という状況であり、他の養殖種と比較しても復旧は遅れている。最近まで、補助事業の対象がチリ地震による津波被害時(10年2月)と同様に「種苗を導入した養殖施設のみ」と伝わっていたことが影響したものと思われるだけに、今後の復旧加速が期待される。

(注7) 2011.11.9付読売新聞「ホヤの殻通し再開」

(注8) 天然ホヤを屋内のタンクで産卵させ、幼生を縄に付着させる。産卵期は12月中旬～2月初旬で、付着後は湾内で育てる。海水をくみ上げるポンプや発電機、タンクなどが必要だが、経費は40万円程度とされる。

(でむら まさはる)